

孤独な女ロビンソン——モル・フランダーズ

塩谷清人

小説を書く前に

デフォーが小説を出版したのは五十九歳の時で、その前の著作活動は政治、社会、歴史など多方面のジャーナリスティックな雑誌記事（ほとんど彼一人で九年間書き続けた『ザ・レビュー』(The Review) (一七〇四—一三)を含めて）が中心であった。その中で目立つのは、経済に関する言及で、彼にとって、商業、特に貿易は国の要という認識があった。デフォーの小説を読解する場合、このことはかなり重要である。

デフォーの小説は多くの社会問題を取り上げる。例えば、『モル・フランダーズ』(Moll Flanders) (一七二二)⁽¹⁾では孤児の施設の問題、教育の問題、負債者に対する処置、アメリカ植民地との関係などである。この最後の問題に関してはさまざまところでデフォーが論じ、提言しており、その実践例を『モル・フランダーズ』で示してくれている。通称「ランカシャーの夫」にヴァージニア移住を持ちかけるモルは次のように説得する。

：私はその地方「ヴァージニア」の人々の植民のことを話題にして、いかに彼らが当地の決まりによってかなりの土地を与えてもらうか、そうでなければ、わざわざいう必要もないほどの安いレートで買うことができるかを言った。

それから私は植民のやり方を十分によく分かるように説明して、わずか二百か、三百ポンドの価値のイギリスの製品を持って、召使い数名と道具を用意すれば、実務的な人ならすぐに一家を養う基礎を築き、数年もすれば資産を成すこともできると言った。

(一五七)

これはデフォアの植民地開拓プロバガンダとして読むこともできる。現金は植民地では役に立たず、「イギリスの製品」を持つていくと書いているところも、現実を反映している。

また『モル・フランダーズ』では、当時の女性が遭遇するさまざまな問題、教育、結婚、家庭、親子関係などが描かれる。彼は三十七歳（一六九七）の時に「諸計画に関する一考察」(An Essay upon Projects)という、実質的に彼の処女作であり、彼の基本的思考を何う重要な論文の中で、女性教育のためのアカデミー設立(Academy for Women)を提言した。女性が男性と同等の能力を持ちながらその育成の場がないと指摘した。デフォアは彼が関心のある諸問題を小説では一人の人間の体験談の中で示している。

『モル・フランダーズ』はモルが一六八三年に書いたと物語の最後のページに書いてある。ところが扱われている諸問題はほとんどこの本が出版された一七二二年頃に話題になっていた。そこで細かな点ではアナクロニズムが生じている。モルの生きていた頃にはそのような問題はなかったとか、制度がそうなっていなかったなど

の、指摘ができる。しかしデフォアの小説執筆の背景を考えればこのような時代的矛盾はそう不思議なことではない。つまり『モル・フランダーズ』は過去の回想記ではあるが現在の話でもある。

ヒストリーから小説のヒストリーへ

十八世紀、特にその前半のイギリス小説はまだ創成期であつたから、既成の「小説」の概念、枠にとらわれる必要はなかつた。小説はデフォアがこれまでの著作活動を生かして書くことが可能なオープンな世界であつた。彼は時事的な問題を書く一方で、当時人気のあつたさまざまなジャンルの創作も手がけていた。いわゆるニューゲイト物といわれる犯罪者の略歴も書いた。『モル・フランダーズ』はピカレスク・ノヴェルとの関係以上に、この延長上で考えることができる。作品のタイトルページにはゴシック体ではつきりと「彼女自身の備忘録より」(from her own MEMORANDUMS)と書いて、犯罪者の実録を装っている。

彼がそれぞれの小説につけた「序」は、彼が小説をどのようなものと考えていたかのヒントを与えてくれる。『モル・フランダーズ』の「序」の冒頭は次のようになっている。

最近、世間はノヴェルとロマンスに夢中で一個人のヒストリーなど本物とは受け入れがたいでしょう、しかもその当人の名前や他の状況が明らかにされていないのですから…

(一)

デフォーはここで自分の小説を「ヒストリー」といつている。ここで使われている「ノヴェル」は、「ロマンス」と同様に非現実的な作品という意味で使われている。⁽²⁾

「ヒストリー」と「ロマンス」の対比は十八世紀の小説家がたえず言及していた。十七世紀末のアフラ・バーンから、フィールディング、リチャードソン、スモレット、スターンまで、「ロマンス」ではなく「ノヴェル」でなく、「ヒストリー」を書いたと主張した。というわけで、この「序」自体にデフォーの独自性があるわけではない。しかし、多義的な「ヒストリー」に込める意味合いは、デフォーの場合もつと意味がありそうである。

当時の使い方として、「ヒストリー」は歴史的事件の経緯（ペストの流行『疫病流行記』*Journal of the Plague Year*（一七二二））を書いたものだけでなく、一個人の生涯（*life-history*）やある出来事（暴風『嵐』*The Storm*）（一七〇三）など）も含まれる。当時大流行していたニューゲイト物もヒストリーに入る。ある過去に起こった事実を描いたものは当然入るが、そこに多少のフィクション性も許容されていた。⁽³⁾

それではこのような意味でのヒストリーと、デフォーがヒストリーと呼んだ小説の差はどの点にあるのだろうか。まず第一に、デフォーの小説の主人公はロビンソン・クルーソーを除きすべて架空の名前を使いながら、実在人物らしく見せかけている。架空の人物であること自体がフィクション性を認めている。また小説では「私」が生涯を語る一人称小説の自伝的回想形式を取る。過去の出来事に現在の意識も入れば、精神的な内省も入り込む。特に心理面の描写が多くなるのは注目される。事実と虚構が自在に交差しあう。デフォーがヒストリーという新しい「小説」を執筆した動機の一つはこの辺にある。

現実批判もあれば、信じられないほどの気ままな行動が許される。『モル・フランダーズ』の前半や『ロクサ

ナ』(Roxana)(一七二四)はヒロインが恋愛をし男性遍歴をする。つまりロマンズの要素もある。これは先ほどの「序」の引用の主張とは裏腹に、意外にもデフォォ小説が「ヒストリー」からの発展ばかりでなく、「ロマンス」からの系譜も否定したいことを示す。⁽⁴⁾モル・フランダーズの様々な粹を打ち破っていく姿は単なる現実性を越えている。現実には精神的試練の場として読めるし、実際デフォォはそのように考えていた。彼の作品が寓意性を持つのはそのためである。第一作の『ロビンソン・クルーソー』(一七一九)から五年余りの間に集中的に書かれた小説群はデフォォの小説に対する一貫した姿勢を示している。

精神的決着として

デフォォの小説を読んで読者がまず感じるのはその圧倒的な物質、事物中心の描写であるが、一方で絶えず言及される罪の意識、倫理的チェック、そして信仰の問題は無視するわけにいかない。というより、デフォォは倫理的な問題を小説で扱うことを望んだ。

モル・フランダーズは十数年に及ぶ犯罪歴の末について捕まってニューゲイトで牧師の説得で悔い改める。その場面では、

…私は過去のこと「犯罪」で恥ずかしくなり涙をながしたが、同時に本当に改心してこれから悔悟者の満足感が得られる、つまり神に許されると思うと不思議にもひそかな喜びも感じた。これらの思いが駆けめぐり、

私に強烈な印象を与えたから、今なら処刑場へ解放された気持ちで行けると思った。

（二八九）

いわゆるニューゲイト物でも見かけられる悔悟の一節は、それ自体に違和感があるわけではない。しかし『モル・フランダーズ』では後で書くように、モルの悪行ぶりをずっと読んできた読者は、このような挿入的な悔悟の一節に多少抵抗を感じる。デフォー自身もそれを自覚している。つまり読者の期待に反する書き方をしていることを知っている。

これ「神への感謝の気持ち」はそれ自体一貫性のない、この本の本題からはずれたこと考えられるむきもあるかも知れない、特に私の話の犯罪行為の部分の話を喜び、楽しむ読者の多くはこの部分を喜ばないかもしれない、実はこれこそ私の人生の最良のことであり、私にとってもっとも有益なことであり、他の人にとっても一番教訓になることなのだが。

（二九一）

クリスチャンが自分の行為を神の教えに照らして考えるというのは自然であるが、さらに自己の伝記を書くピューリタンの場合、その傾向がより一層強くなる。現代の読者は『ロビンソン・クルーソー』の中で、ロビンソンが自分の行為の善悪を家計簿の貸借表のようにしてチェックするのを読んで驚く。これはいかにもデフォー的な（経済的な観念で決めるという）例ではあるが、そのような善悪判定はピューリタンの基本姿勢である。ピューリタンは自己検証のために日記を書いたり、回想録を書いた。

デフォーはプレスビテリアンの父を持ち、彼自身一時その牧師になるかどうか迷ったことがある。また一六八五年のモンマスの反乱に加わってあやうく命を失いそうになったが、それもこれから即位するジェームズ二世がカソリック支持を鮮明にし、デフォーはそれに危機感を持ったためである。彼はつねづね経済活動を重視するが、その場合も常に信仰、良心とどう折り合いをつけるかで悩んでいる。つまり彼の信仰心は無視できない。これは『ロビンソン・クルーソー』に顕著である。

『モル・フランダーズ』を見ると、タイトル・ページには次のようなことが書いてある。

ニューゲイトに生まれ、少女時代を除いて三十年間もの波乱に満ちた人生で十二年間娼婦として、五度妻（その内一度は実の兄と）となり、十二年間窃盗をし、八年間重罪犯としてヴァージニア送りとなり、最後はお金持ちになり、まっとうな暮らしをして、悔悛して死んだ。

当時の読者の多くはこの多少きわ物的な題名に引かれて読んだが、最後の行に書かれた「悔悛（者）」（Penitent）という言葉がキーワードとして、本文中にも繰り返されることになる。この小説は「悔い改めた」モルが語る回想記である。しかし、果たして悔い改めたのかどうかは問題である。

視点の混同とアイロニーの問題

『モル・フランダーズ』のポイントは、回想するモルが若い頃の所業をどのように考え、書くのかという点にある。モルは犯罪を犯す過去の自分の姿との距離を測りかねている場合がある。逆にその時の状況に飲み込まれてもいる。それほどさまざまな規範や義務を無視して行動するモルは魅力的だということでもある。しかしそうなるのと現在の視点はなくなってしまう。一方取って付けたように反省を繰り返せば、平板な回想記になる。この難問がつねに『モル・フランダーズ』につきまとう。さらに作者デフォーとの関係も関わる。

このことを考える上で多少ヒントになるのは、作品の「序」である。ここでは、校閲者(つまり作者デフォー)は、モルが書いた原文が「悔い改め、慎ましくなった女性を書いたものというよりは、今なおニューゲイトに収監されている犯罪者の言葉遣いだったので」(一)校閲者は「もっと適切な文体に直した」と、いかにも修正し、削除したような書きぶりになっている。またモルが後には「最初そうだったほど立派な悔悛者ではなかった」(五)とも書く。モルの悔悛が本物でなかったことを示唆している。デフォーはモル・フランダーズから少し距離を置いている。(5)

文字通り受け取れば、「序」の校閲者は回想者モルにアイロニカルな見方をしている。しかし、校閲したとされる本文は全体としてはアイロニーがはっきりしない。デフォーの視点がはっきり見えてこない。読者はモル・フランダーズの視点(しかもかなりが過去のモルの視点)に縛られる。この点はイアン・ウォットの指摘以来論争を巻き起こした『モル・フランダーズ』のアイロニーありなしの問題になる。(6)

『非国教徒撲滅捷徑』(The Shortest-Way with the Dissenters)(一七〇二)で示しているように、デフォーは一つの作品を書く時に、ある人物になりきって書く。つまり、他人を演じる(impersonate)。しかし『非国教徒撲滅捷徑』が当時の人に誤解を与えたように、あまりその人物になりきると、アイロニーが伝わらなくなる。『モル・フランダーズ』もその例として読める。⁽⁷⁾ それと関連することだが、未だに多くの作品をデフォーの作と断定することができないでいる。⁽⁸⁾ つまり、デフォーは作品によって自在に書き方を変えることができたから、他人の筆とされるものがデフォー作品であることも大いにある。

モル・フランダーズの逆境からの脱出方法

モル・フランダーズは孤独な女性である。イギリス社会という閉塞的な中でさらに監獄から話は始まる。この作品には監獄のイメージが横溢している。⁽⁹⁾ 彼女はニューゲイトに生まれ、犯罪者の母はヴァージニア送りとなり、モルは親戚の許に引き取られたが、物心ついたときにはジブシーの団に連れられて移動していた。父についての言及はない。

デフォーは不利な状況に置かれた孤独な人間に興味を持っている。さらにデフォーは強烈な個性を持った犯罪者を主人公に選ぶ。つまり一方では、デフォーの主人公は犯罪者の群れの一員である。「モル」という名前が女スリの代名詞として使われていたというのもそれを示す。と同時に、彼らと同一視されることを拒む。

デフォーの社会的事象への関心の強さを示すように、第一ページから孤児院問題が取り上げられている。この

ような社会問題の取り上げ方は従来のニューゲイト物にはない要素である。モル・フランダーズのモデルになるような犯罪者は当時たくさんいた。デフォーが関係する雑誌『デイリー・ジャーナル』(Daily Journal)にはモルキングという当時話題になっていた女盗賊のことが載っている。⁽¹⁰⁾ デフォー自身もニューゲイトに五ヶ月入獄していたから、いろいろな情報は持っていた。というわけで、ヒストリーとしての資料は十分過ぎるほどあった。

モルのような身よりのない女性には、十八世紀イギリスでは二重、三重にハンディキャップを背負っている。モルの生涯は生まれ落ちた状況ですでに予見されているようにも見える。さいわいにもコルチエスターで立派な家庭に預けられる。ところがこれが逆に災いとなる。お金持ちの子女の服装を見、その教育を脇で聞いている内に彼女の生来の上昇意識が活発になる。「この世で美しい服ほど好きなものはない」(一一三)という女になる。ふつう彼女のような環境の女性が辿る人生コースは召使いになることであつた。しかしモルはそのような卑しい労働はしたくない。

モルの姿勢は当時の一般的な考え方(召使いは召使いとして身分相應で安住すべしという)とは反する。ロクサナはもつとラディカルで、フェミニストでもあり、「女に生まれたのは私の不幸だが……自由は男性の所有のようだから、私は男のような女(man-woman)になる」⁽¹¹⁾と主張した。

モルは小さい時に、「淑女」(Gentlewoman)になりたいと言って、皆から笑われる。そう呼ばれているお針子(実はいかかわしい女性)のようになりたいと言ってまた皆から笑われる。この言葉は本来「血筋のいい婦人」という意味である。ここでは二重にアイロニーが発揮されている。ただこのアイロニーも一筋縄ではいかない。というのもデフォーほどジェンテリティに囚われた人もいないといわれるほど、彼自身は生涯「紳士」になろう

と考えていた。名前を「デ・フォー」としたのもその現れであるし、「完全なイギリス紳士」(*The Complete English Gentleman*) (一七二九) という論文では、血筋より、育ちや教育のある紳士 (*bred gentleman*) を誉めて持論を展開した。⁽¹²⁾

『モル・フランダーズ』の前半は結婚をめぐるモルの生き方を描く。卑しい生まれのモルが奉公にも出ないで生きるために取りうる手段は、性を活用することしかない。自分の肉体を商品価値として活用するしかない。大柄で美人のモルは十八歳の時にコルチェスターの家で上の息子に誘惑され、最初に関係を持つ。モルは彼を本当に愛していたと主張するが、二人の愛情はお金が仲立ちしている。愛情と金銭の連結はモルの精神性のありかを示唆する。彼は接近する当初からお金をモルに渡す。その結果、肉体関係になる。

…もし彼の考えが分かっている、なかなか容易には私を手に入れられないと思っていたことを私が知っていたら、私は自分の条件を示して、すぐ結婚という条件とまではいかなくとも、結婚までの扶養くらいの条件は出せただろうし、ほしいものも手に入れられただろう…
(二五—二六)

ノヴァックの指摘のように、⁽¹³⁾ 処女を奪われたことを道徳的損失としてより、経済的配慮がなかったと後悔している。「条件」(*capitulation*)、⁽¹⁴⁾ 「条件で」(*capitulated*) という言葉を使っているが、これは契約を連想させる。自分の肉体的価値が下がったと考える。「選択の自由を発揮する勇気がないために、女性を簡単に手に入る (*cheap*) と見られている」(八二) ともモルは警告している。結婚は奴隷になることとして結婚を嫌うロクサナと違って

モルは結婚によつて生活の安を得ようとするから、いい条件であれば結婚する。モルの最初の男は結婚する意志がなく、モルの言い分ではだまされたということになるが、モル自身の上昇志向も大いに関係している。「こうなったのも私の虚栄心から」(一九)と、現在のモルは自分にも責任があることを一応認めている。

最初の結婚はこの男の弟ロビンとである。兄に押しつけられた恰好で結婚する。一方で兄を愛しつつ、愛してもしないロビンと結婚することで、モルは最初の結婚から間違ひを犯していることになる。回想するモルはこう書いている。

私は毎日自分の願望の中で彼「兄」と姦通と近親相姦を犯していた、それは明らかに、実質的な犯罪行為だった。

(五九)

デフォー小説ではよくあるピューリタンの一節であるが、彼の小説に対する道德的要素をよく表す。結局兄への愛情と物質的な安定(五〇〇ポンドの手切れ金までもらつて)を交換している。ロビンとは五年間の結婚生活だが、わずか数行でそのことは片づけられる。彼が死んだ時に手元にあるお金は千二百ポンドだった。これは「まあまあ金額で」(五九)何人かの商人に言い寄られる。モルは最初の手痛い恋愛、結婚体験から、自身が被害者にならないように策をめぐらし、狡猾になつていく。

次に結婚したのが、「紳士気取りの商人」(Gentleman-Tradesman)(六〇)というモルの理想とする呉服屋。この場合も「自分で仕掛けた罠にはまった」(六〇)。積極的なのはモルの方だったことが分かる。モルは使用人を

使つて自分は働かなくてもいいジェントルマン的な男を求める。このあたりはデフォアのアイロニーと読める。「完全なイギリス商人」(The Complete English Tradesman)(一七二五)では、商人が虚栄や放蕩で派手な生活をすることは破産する元であるとしている。一方で、一六九二年の破産直前のデフォア自身の贅沢な生活も関係があるという指摘もある。¹⁴ となると自身へのアイロニーであるかもしれない。とにかくモルの相手は派手な遊び人で、二人で六頭立ての馬車に乗りオクスフォードへ観光に出たりする。あげくは破産して負債者監獄というお定まりのコースを辿る。ここではデフォア自身も体験した負債者、その監獄の問題が取り上げられる。

しかし回想するモルがこの男と遊び回る過去の自分と距離を置いているとは読みにくい。回想者モルのコメントはこうなっている。

虚栄はめかし屋の極致である。夫は出費など頓着しないという長所があつた。彼のその後の生涯はあまり重要ではないので簡単に書くと、二年半後に破産して、保釈してもらえないほどの要件で負債者監獄に入れられ、そこから私を呼んだ。

(一六二)

引用の最初のところは男への皮肉であるが、同じように遊んだ自分自身に対する反省の言はない。

結局、彼は逃亡してフランスへ行く。モルの手元に残ったお金は五百ポンドだった。皮肉なことに、彼女の貯蓄がロビンが死んだ時より少なくなっている。モルは貯蓄を口にしたがらずしも度重なる結婚はそれを現実にしていない。とにかく五回の結婚による収支は必ず示される。モルはできるだけ高く自分を売ることを心がける。

そのために結婚するときに自分の全財産を相手の男性に決して明らかにしない。多少の虚偽は経済活動にはつきものだ。デフォーはビューリタンとしてこの点に頭を悩ましている。経済は重要だが、その行為には倫理的に問題もあると考えていた。⁽¹⁵⁾

女性が結婚できるかどうかは多額の持参金(dowry)のあるなしで決まる時代である。以後のイギリス小説に頻繁に出てくる問題である。「女は一人で相談相手もいないと、公道に落ちた財布か宝石と同じで、つぎに来た通行人に拾われる」(二二八)餌食的存在なのだ。「この未亡人は資産がないと思われたら終わり」(七六)である。身よりのないモルはあらゆる手段を使って結婚にこぎつけ、安定した状態を得ようとする。持参金があると見せかけて資産家と結婚する。実はその男もベテン師で一文無しであつたという笑い話の挿話もある。これはランカシャーの男との結婚である。

さらに悲惨なのは兄との結婚という近親相姦の問題だ。子供まで産まれた後に気がつくのだが、デフォーはこの作品では重婚や、出奔して行く方知れずの夫、つまり離婚不能の状態での男女関係とか、狂気の女を妻に持つ男との関係とか、さまざま男女関係の問題にモルを遭遇させている。そしてその度に子供を生みながら、顧みることがない。デフォーが女性のセクシュアリティに関心を示して、その旺盛な欲望をこのモルに描き込んだという読み方もあるが⁽¹⁶⁾、彼女の度重なる結婚、及び男性関係さらには子供との関係はたえず現行法や道徳理念などに抵触するか、それを意識させるものであることが注目される。デフォーが小説に託した要因を確認できる。

犯罪者モルの救済法

四十八歳になったモルはまじめな銀行員の夫を亡くし、お金もなくなり、容色も落ちて肉体を利用できなくなつてから、窃盗を始める。初犯の時のロンドンの通りを必死に逃走する姿、その時の心理状態の描写は迫真性がある。しかし、宿泊場所にもどつて最初にしたことは、盗んだ物を調べることから始まる。

包み物が何のためのものか、どういうことでそこに置かれたのか、分からなかったが、開けてみると、中に子供ベッド用の布地、大変ものがよくてほとんど新品で、極上のレースのもの、一パイント用の銀のスープ皿、銀の小さなマグ、それに六本のスプーン、さらにいくつかの布地、立派なスモック、絹のハンカチ三枚、マグの中に十八シリングと六ペンス分の手形一枚があった。

（一九二）

およそ二十年近く前の盗品の中身を、これほど克明に記憶している七十近い老女モルの記憶力はたいしたものだ。この部分も犯罪による経済学（収益の確認）として受け取れる。すぐに良心の呵責に悩むが、二回目の犯行後の告白のように、「略奪品のことを考えると最初考えたようなことはすべて吹き飛んでいった」（一九四）。「殺人と裏切り以外のすべての犯罪を犯した」（二七九）というモルは、犯行にあらゆる知恵を絞っている。偽名はもちろん、時に変装して男装したり、乞食になる。何人かで組んで犯行することもあるが、基本的には単独犯である。孤独な犯罪者である。

：私は一人の時はほとんど危険な目にあわなかった、あつたとしても他の人たちのろまなやり方に巻き込まれた時よりずっと上手に逃れた、他の人たちは私より先が読めなくて、沈着でもなかった…

(二二〇)

ずいぶん頭のよさそうなことを書いているが、火事場泥棒をしようとして上から落ちてきた布団に当たって氣を失ったとか、馬丁から預かった馬を盗んで処分に困ったとか、自身もとんまなことをやっている。

モルは自分の犯罪行為を「私の置かれた状況の恐るべき必要性(Necessity)」(一九三)の故と説明する。モルは「必要」に迫られて次々犯罪を重ねる。「必要」はデフォー小説のキーワードの一つである。そして「貧困」がその第一原因とされる。「盗みなどしなくてはすむように、貧困にしないでください」(一九一)という叫びが繰り返される。自分の中にある盗みの衝動を「悪魔」(the Devil)と擬人化して呼び、その「誘惑」にしばしば負けているという。

これはノヴァツクの指摘⁽¹⁷⁾のように自然法的弁護である。また決疑論的な弁護でもある。つまり、人は飢餓の状態になれば、人に危害を加えない限り生命保持のために何をしてもよいという自然法の考えが背後にある。ノヴァツクの言い方を借りれば、「モルは神の法で自分を裁き、自然法で自分を許している」⁽¹⁸⁾ということになる。モルが犯した犯罪で一番後悔し、こだわっているのは、火事で焼け出された母子に包みを預けられた時、これを持ち逃げした件である。これは自然法的にも弁明できないことだったから、「私が関わった最悪の盗品(the worst Prize)」「非人道的行為(the inhumanity of this Action)」(二〇七)ということになる。

しかし、モルは窃盗を重ね、かなりの蓄財ができ、もはや「貧困」、「必要」云々の弁明が許されない状態になる。

思ひ出すと、ある日いつもより少しばかりまじめな気分になって、手許には分け前として二百ポンド近くあったこともあって、かなりのたくわえがあることに気づき、やさしい精霊、そんなものがあるとして、の導きか、最初は貧困につき動かされ、困窮がこのような恐ろしい算段を使ってしまったが、今はそのような困窮も取り除かれたのだから……いい状態の今きっぱり止めていいではないか……という思いがくつきりと頭に浮かびました。

（二〇三）

「少しまじめな気分になって」というのは回想するモルの皮肉なコメントだが、信仰心のもととあまりないモルは本気で悔い改めることはない。犯罪もそうだが、デフォーは商売をどこで止めて引退するかについて言及している。⁽¹⁹⁾ 商行為も危険を伴うからである。結局モルは犯罪を続けるのだが、彼女の言葉では「貪欲」(greedy)という欲望に動かされている。その場で盲目的に刹那的な犯罪行為を繰り返す。

……私の仲間のさらに何人かはこの仕事を始めて半年ばかりでニューゲイトに入れられているが、私は「捕まらないで」五年にもなる、ニューゲイトの連中は私自身を知らないけれど、噂でよく知っていていつ捕まるかと待っているが、私は捕まらない、大変きわどい時もあったけれど。

（二一四）

と自慢げに語る。ついに「モル・フランダーズ」という名前まで犯罪者仲間からつけられる。「私は当時一番の腕前(the greatest Artist)でした」(二二四)とも書く。

ついには捕まってニューゲイトに入るが、その前後のモルの精神状況はさらに「私は墮落して石のように冷酷な女になった」(二七八)とか、「私は今や後悔の念も悔悛の念も持たなかった」(二七九)ともある。これはニューゲイトの他の囚人と同化したことを示すことでもある。集団の中に飲み込まれる。「私は単なるニューゲイトの囚人になってしまった(a mere Newgate-Bird)」(二七九)という自覚はモルにとってつらいことである。このあたりの心理的变化の描写は見事なものだ。

このような「まったく邪悪な、まったくさげすむべき人間」(二六八)が、同じような運命で捕まったランカシャーの夫の姿を見、さらにある牧師の説得で一転して再生し、悔悛する。「私は完全に心が変わり、別人になった」(二八二)という。これはニューゲイト物のパターン化された懺悔録に従っているとも読める。

さらにモルは夫と一緒にヴァージニアに移送され、そこでプランテーション経営をするが、その元手になるのはそれまで犯罪で貯めたお金や金時計などである。再生のためにそのような金品を使うことに頓着しないモルに、読者の多くは戸惑うだろう。デフォーもそれが分かっているようで、「これほど悪い方法で貯めた『夫と自分の』資産が新しい生活を始めるために一緒にされたこともないでしょう」(三二二)とアイロニカルに書いているが、そのことは追求されない。しかも最後の一節には、モルは「過去の悪い人生を本当に悔い改めた気持ちで余生を送るために」(三四三)イギリスに帰国したとある。

悔悛して幸福な余生を送るというのは一つのパターン化された終わり方である。しかし、モルの場合にそれが説得力を持つかどうかは問題である。実際「序」の説明を再度引用すれば、「「イギリスにもどつてからは」彼女は大変長生きをしたようだが、最初ほど大変立派な悔悛者ではなかった」（五）という皮肉な書き方になっている。当時の読者の反応も同様で、直後に出たいくつかのブロードサイドは、勝手にモルを処刑にしたりイギリス帰国を許さずアイルランドに行かせたりしている。（20）

このように『モル・フランダーズ』が読者にパターン化した受容を拒否させる要因は、デフォアの書き方にある。この小説ではしばしば解釈は読者に委ねられている。

：私の物語（ヒストリー）の道德的意味は読者の知性と判断力によってまとめられるよう委ねられている、私には読者に説教する資格はない。

（二六八）

つまり、モルの悪行は救いたいと判断して、このハッピーエンディングを拒否する読みもできる。一方ではどのような悪行であれ、悔いた者は許されるという読みもできる。後者の読みをもちろんでフォアは期待しているわけだが、必ずしも強要しているわけではないようだ。「序」にはさらに「この作品は主にこれの読み方を知っている人たちにおすすめる」（二）と読者の多様な読みをすでに予測した形になっている。

最初にも書いたように、デフォアの小説はどのような人生であつても、最終的に神の裁きの正しさ、また総決算的な救済を確認する。小説はその決算書、確認書のようなものである。そう考えると、デフォアが一つ一つ

の行為の前後関係を丹念に追い、それと同時にその時々々に内省していくというのは、その明細の確認とも読める。モル・フランダーズの場合はあまりに負の部分が多く、それが魅力的に書かれているためにその決着ができないのだ。しかしこれはデフォアの読者への挑発とも受け取れる。

デフォア小説の多義性は『モル・フランダーズ』で頂点に達している。

注

- (1) 使用テキストは「オクスフォード・ワールド・クラシックス版(一九九八)」
- (2) J. Paul Hunter, *Before Novels* (W.W.Norton and Company, 1980), Michael McKeon, *The Origins of the English Novel, 1600-1740* (The Johns Hopkins U.P., 1987) 参照。なお、「ノヴェル」が現在のな意味で定着し出したのは十八世紀後半からである。
- (3) Robert Mayer, *History and the Early English Novel* (Cambridge U.P., 1997) p.35.
- (4) *The Origins of the English Novel, 1600-1740*, p.21.
- (5) ただ校閲者の介在という形式自体は作品に信憑性を持たせ、読者の信頼を勝ち得るための、当時のフィクションにおける常套の技法であり、同様の例はスウィフトの『ガリヴァー旅行記』にも見られることだから、どこまで「序」を重視するかは解釈が入ってくる。
- (6) ウォットはアイロニーとは作者が意識的に矛盾した、反対のことをいう場合であるとした上で、この作品にはデフォアが意識的に書いたアイロニーはないと書いた。個別箇所ではあっても、作品全体にアイロニーがあるとはいえないとした(Tan Watt, *The Rise of the Novel*, Chato & Windus, 1957, pp.119-131)。ウェイン・ブースもウォットの影響を受けて、この作品についてデフォアが意図的であるかどうか判断しにくくとした(Wayne C. Booth, *The Rhetoric of Fiction*, The University of Chicago Press, 1961, pp.318-328)。それに対して、ハワード・クーンズやロバート・ドノヴァン、さらにデフォアの権威者マクシミリアン・ノヴァックは一齐に『モル・フランダーズ』に一貫したアイロニーがあると指摘した(Howard L. Koonce, 'Moll's Muddle: Defoe's Use of Irony in *Moll Flanders*' in *ELH* 30(1963), pp.377-94; Robert Alan Donovan, *The Shaping Vision: Imagination in the English*

- Novel from Defoe to Dickens*, Cornell U.P., 1966. pp.34-45. Maximilian E. Novak, 'Conscious Irony in *Moll Flanders*,' in *College English*, vol.26, 1964)° ハッセルとデフォーの距離を考察し、終止した意見を再度検討する。° (Ian Watt, 'The Recent Critical Fortunes of *Moll Flanders*' in *Eighteenth Century Studies*, vol. 1, 1967)
- (7) Leopold Damrosch, Jr., 'Defoe as Ambiguous Impersonator,' in *Modern Philology*, 71, 1972-73 参照°
- (8) P.N.Furbank & W.R.Owens, *The Canonization of Daniel Defoe* (Yale U.P.,1988) 参照°
- (9) John Bender, *Imagining the Penitentiary: Fiction and the Architecture of Mind in Eighteenth - Century England* (University of Chicago Press, 1987) 参照°
- (10) Pat Rogers, 'Introduction' (Everyman's *Moll Flanders*, 1993) p.xix-2-4 参照°
- (11) *Roxana* (The World's Classics, O.U.P.,1981), p.171.
- (12) ハッセルとデフォー° Michael Shinagel, *Daniel Defoe and Middle-Class Gentility* (Harvard. U.P.,1968). 第一一章参照°
- (13) Maximilian E. Novak, *Economics and the Friction of Daniel Defoe* (Russell & Russell, 1962) p.87.
- (14) Michael Shinagel, *Daniel Defoe and the Middle-Class Gentility* (Harvard U.P.,1968), p.158.
- (15) サミュエル・J・メイシーの引用による。° "Trade is almost universally founded upon Crime." の場合の 'crime' は「養育」の意味とどう説明される。
- (Samuel L. Macey, *Money and the Novel*, Sono Nis Press, 1983, p.73)
- (16) Carol Houlihan Flynn, *The Body in Swift and Defoe* (Cambridge U.P.,1990) 参照°
- (17) Maximilian E. Novak, 'Conscious Irony in *Moll Flanders*,' in *College English*, vol.26, 1964.
- (18) 同書°
- (19) *The Works of Daniel Defoe* ed., by John S. Keltie (Charles Griffin & Co., 1869). p.585; それによると商売から引退する時の資産は二万ポンド。これを固定利率の証券に投資すると言うもの。メイシーによれば、当時の物価水準では年収五百ポンドで豊かな生活ができたが、デフォーの頭では千ポンドが理想である。° (op.cit., pp.75-78)
- (20) Lincoln B.Faller, *Crime & Defoe* (Cambridge U.P., 1993). pp.105-106.